

つどい

第 452 号
2026.6.1発行・豊中歴史同好会
責任者 小川 滋

国宝「七支刀」と

富雄丸山古墳の「蛇行剣」
―矢田丘陵に眠る巨大円墳の被葬者像を追う―

元読売新聞編集委員 坪井 恒彦

一、「蛇行剣」誕生の背景

奈良県天理市の石上神宮は社伝によると建御雷が葦原中国を平定するのに用いたとされる「布都御霊剣」に宿る「布都御魂大神」を主祭神とする。但しこの剣とは別に「社宝」として伝わるのが国宝「七支刀」である。全長七四・八センチメートルで主剣の左右に段違いに三本ずつの枝剣を持つ類例のない形状で知られる。武器としての機能

はなく、大陸由来の道教思想に根付いた霊力、呪力を期待する霊剣、呪剣的な意味を持つとも言われる。その表裏に金象嵌で記された六一文字の銘文は「泰（太）和四年（三六九）に百済国王・近肖古王の世子（後の近仇首王）が倭王のために造らせた」と読み取れることが二〇二五年のX線CT調査で確認された。

四世紀後半の百済は北隣の高句麗から激

国宝「七支刀」と富雄丸山古墳の「蛇行剣」

・矢田丘陵に眠る巨大円墳の被葬者像を追う・

山辺の道の遺跡・古墳めぐり

坪井 恒彦
木村 幸子

しい侵略を受けており、朝鮮半島南部・伽耶に鉄資源ルートの既得権を確保していた倭国に参戦を求め、両国が対高句麗への軍事同盟締結につながる。その証として百済側から倭国王に贈られたのが「七支刀」に他ならないとされる。実際、日本書紀に紀年で三六九年の三年後に当たる「神功摂政五二年九月十日」条に「七枝刀（ななつさやのたち）一口」などが神功の元に届けられたことが記録されている。この百済伝来の「七支刀」が持つ霊力・呪力に魅せられ、さつそく四世紀後葉、模範的に復元・再現され始めたのが「蛇行剣」ではなかったのか。そんな仮説を立てているのが奈良市埋蔵文化財調査センターの前所長で世界最大の古代剣（蛇行剣）を副葬していた富雄丸山古墳の発掘調査を主導した鐘方正樹氏で